

滝井孝作「無限抱擁」を読む

松子の「精神」と母の「因襲」から

秋 口 千 草

—

「無限抱擁」(昭和二年九月 改造社)^①の主人公、竹内信一は、俳句誌の編集の仕事しながら句作に励み、のちに小説家をめざすことになる青年である。ある日、信一(二十四歳)は句友に誘われて吉原に出掛け、娼婦松子(二十二歳)を見染めて恋におちた。信一の積もる想いの果てによりやく結婚するに至ったものの、長年の労苦から肺病を患った松子が、結婚後はじめた髪結いの仕事に精を出せたのも束の間、わずか二年余りで、信一と松子の母に献身的に看取られながらも息を引き取り、二人の結婚生活が終焉を迎える。そして、松子亡き後、遺された母との後日談が信一の一人称で語られている。

ここに描かれる若いふたりの人生は悲哀に充ちているものの、描かれたものは悲哀だけではない。そう感じられる一つは、信一の松子を想う実直で誠実で揺るぎない強靱な生き方によるものであり、それはたとえば、浅見淵が作者の「清冽なストイックな精神が躍動して活写されているところ」^②にあるのだと指摘し、また河盛好蔵が、この作品は「誠実で求道的な知識人の魂の記録」^③だと述べてきたところのものである。

そしてもうひとつは、松子の生き方にも感じられるものである。松子の造型については、山本健吉が「松子は日本の近代小説が造型したもつとも美しい女性の一人」であり、「リアルな眼で凝視されながら、しか

もその驚くほど素直に出てくる人間的な美しさが正確な造型で浮き出てくる例を他に知らない」と夙に絶賛した。そしてこれを引いて、中島国彦は、「松子のそうした魅力の根本に」「素直さ」という「彼女の性格があるのはいうまでもない」とした上で、さらに「松子は一人の女というより、絶えず一つの女性像へと高まって行こうとしている」のであり、「そこから汲みつくせぬ光が生まれている」^⑤のだとして、松子の人物造型への読みがなされている。

闘病生活において今わの際まで健気に振舞う「気の確かな静かな病人」であった松子は、ただ一度だけ、やり場のない感情を噴出させたことがある。親しく付き合っていた隣近所の住人が連名で、松子の伝染病の不安と危険を訴える申告書を警察に提出したその顛末がわかったときのことである。そのときの松子の様子を目の当たりにした信一は、「人情の消えた、その思ひは人に尽くした好意が水の泡のやうで、二十何年の彼女の人生観は破れて終ふやう」だと感じ、何としても彼女の「善い精神迄減らしたく無かった」と言って、やさしく松子に向き合い昂ぶった感情を鎮められるように、外に連れ出して穏やかなところを取り戻してやっている。

信一が一途に守り抜こうとした松子の 人生観、あるいは 善い精神、こそ、「汲みつくせぬ光」を生み出しているのだが、はたして松子の 生とはどのようなものだったのか。また、そのような松子に向き

合う信一の生とはどういうものだったのか。作品世界に描かれた松子と信一の生の内実を跡づけてみたいと思う。

二

信一が見初めた松子は吉原の娼婦であった。「之まで女などに目もくれない木強漢」で通っていたはずの信一が、「樹木が何か揺さぶられて居る様な」気分のなか、逢えば「息詰まる」ほどに惹かれてゆくのは、松子の「正直」で「素直」で、「あゝ云ふ場所にめてそれが染みていない」純真さゆえであると、師事しているH師に訊ねられて答えている。信一は初めから遊びではなく本気だったのである。

けれど、吉原という遊び空間のなかでの本気は、そのの秩序を乱すものに他ならない。松子からは「恋ではない」と告げられ、遊びでないから「座つしやらない方がよい」と言われて、新造の阿米には信一のその一本気を嫌われ、ついに松子と逢わせないようについにされる始末であったが、そうであっても、「未だすれていない故」の「淑やかな人柄」の松子を想う気持ちを、信一には抑えようが無かった。

お前の正直な日がくれて夏座布団

小説に挿入された信一の俳句のなかのひとつである。それまで松子が座っていた夏座布団であろうか。夏の夕暮れ、夏座布団に座る松子の面影を見ながら、彼女の「素直さ」に心動かされたひと日を思い返している。ここにはそんな心情が読み取れる。^⑥

信一はまた、吉原の寢床で松子が語る彼女の子供時分の追憶を好んで聴いていた。彼女の語りを「ある女の子の話」として信一は文章にして

したためている。それはまだ健在であった父と、母の一粒種として可愛がって育てられる少女松子の、七歳のときの話で、仲良しのお友達の家遊びに行く途中に出会うお爺さんを怖がってその子の家に行けなくなってしまう話や、増上寺の山内へ遊びに行つて、子ども達はいつも鐘が鳴るまで帰ろうとせず、鐘が鳴ると人攫いが怖さに山をころがり下りるようにして家に帰る話、リンパ腺が腫れて手術するときの話など、そこには少女松子の「無垢」なるこころの情景が描かれている。現在は娼婦として生きる松子の、そういう場所においても未だなお「すれていない」無垢なるこころの原点を、追憶を語る娼婦松子のなかに信一は看取していたのである。

創作者としての信一の眼が、松子の無垢なる心の美しさを捉えようとするなかで、信一は、「仕事の上からも」松子が是非必要なのだといふ意味で、その想いには、妻として日常生活をともし生きる伴侶という意味に加えて、創作者として生きる自らの、真に深く向き合う存在として松子を捉えようとしていることが示されている。松子を吉原から出す「資力は勿論」なく、「よしつれて来たにしろ其暮らしの道も立たない身」である信一にとって、「一緒にいる」のは端から無謀なことではあった。けれど、「石のよつな心も何時かは動く」と信じてひたすら誠実に松子を恋慕い待つことができたのも、真に向き合う存在としての揺るぎない想いがあつたからなのである。

幾多の困難を経て結婚してからも信一の誠実さと、松子の純真さは貫かれていた。信一は、松子のこれまでの境涯の不純なことに男としての複雑な心情を寄せることもあるけれど、「無垢な暮し」が何より尊いと思望んでいた信一にとって、貧乏な生活に在つても、明るく屈託の無い松子の振る舞いに、心満たされていた。出張先では、松子と離れていることの寂しさに襲われて妻との間柄が深くなるのを実感し、また、職

業口に迷いが生じて社会的に不本意でいたその頃の「堪らない孤独」感を、二人の生活のなかでいよいよ開顕してゆく無垢なる松子の存在ただそのことによって救われている信一であった。一方、松子は、信一が「創作」の仕事に専念できるように、「行末一人の母をみる」暮らしのためにと、病弱な体を圧して「髪結」を志し、信一に心えようとしていた。この頃の初々しいふたりの魂のふれあいがある晩の、松子の実家からの帰り道のこととして描かれる、次のような場面に幻想的に結晶されている。

十一時に、夫婦が一緒に表へ出て、通りはしづまつてゐた。妻恋坂の小路では、味噌問屋のあたり夜業で作る味噌豆の香がたち籠つてゐた。(中略)

「背のたかいお家ね」と松子がいうた、其家の横手から湯島の崖下の道を、夫婦は互に脇肩でもたれ合つて、通り過るのであつた。横丁を半分入つた煉瓦壁の下の溝へ、信一は此所が習慣になつた、小用をする。その間、松子は佇んでゐた。

「ね、お前さんも為ない？」信一は其様な風を、この晩野暮にしひた。

「可笑しいわ、殿方と異つて」

「代つて、番をしてゐてあげるからさ、ね」

いなめぬ松子は

「厭な方あつち向いて、ねえ」というた。左うしてから蹲んだ。煉瓦壁の夜空の梢高い辛夷の梢は、ぬれ紙の塩梅の花が漂ふのであつた。

けれども、ふたりの馥郁とした日々は長くは続かなかつた。松子は吐

血していよいよ深刻な病床生活に入り、信一は同居していた松子の母とともに看病に明け暮れる日々が続いた。それでも小康状態を得たときには、発句のようなものを書き止めて、松子は信一と心の交流をはかる。

をつとめぬ母をらぬ座敷のひろさはたきかけ

松子の瑞々しい心の動きが目に見えるようであるものだが、「安静」を強いられ「労働」を止められていた松子を思い、信一は「労働しては駄目だよ」とやさしく窘める。松子は「薄笑み」を見せてあやまる。そんなやりとりの瞬間にも松子の無垢な明るさが信一の心に深く浸透したに違いない。

病床生活が長く続くと看病する側もされる側も、時に感情のもつれが昂じて「家の凡ての物が急に歪」んでゆく有様に心弱ることもあつた。それでも松子は「気の確かな静かな病人」であり、今わの際まで健気に振舞つていた。「四日間続けて都合五回、之までにならない咯血をやつた」ときなど、傍で看病する者が「耐られ」ず、けれど「顔を反向する事は出来」ないでいたときも、当の「本人松子」が「素直な様子」でいてくれたことに、「一番惹かれ」、そんな松子の様子を却つて看病するものの「心持が支へられ」ていたという。酸素吸入の不具合のため病院まで往復してくれた友人の驚見を氣遣つて、「あちらでお茶をあげて頂戴な」と病床で松子は母に頼む。朝までは難しいと医者に言われた夜のことである。そして、しづかに松子は息を引き取つた。

自らの不幸な運命に抗うことをせず、与えられた運命をありのままに肅々と自らの生の内容として受け入れ、ともに生きる人たちへの真心を失わず、そのなかで今ここにある自らの生の一瞬一瞬をせつせつと生きる。その生の一瞬一瞬に松子の無垢なる「精神」が生きた、と言つても

いいだろうか。松子とはそういうひとりの人間としての生涯を送った。

信一は、そんな松子の「人生観」を尊び、だからこそ、彼女のせつせつと生きる一瞬一瞬の生において開かれる、松子のその無垢なる「精神」を、誠心誠意守るうとしてきた。不幸な境涯にありながらその運命を呪うことなく、どこまでも無垢なるところを失わない松子と、松子の不運な運命をそのままに抱きとめながら、無垢なるところを真摯に愛惜し守るうとした信一。この夫婦が織りなす営みには、純真無垢な愛を貫く誠実さと強靱さが描かれているのであり、結婚生活の時間は長くはなかったが、その深さにおいて永遠なのであった。

室の有様が急激に異つたので驚いた。この室から妻の精神が抜去つたやうで、奈辺に往きつゝあるのだらう？　しばらく益槍してみたが、吹出してゐる酸素吸入の漏斗をば、其顔によくあたる様正しく直すのであった。

その後、松子の死をなかなか受け容れられない信一は、「時候の移り変りを生理的に感じ」ては、寒ソを越せばと云はれた病人の上を憶出し、「妻に似た女の人の夢を屢々見」ては、「夢と事実との区別が出来ない」でいる。松子の「精神」を喪つた信一の惰愴は「神経衰弱」を患うほどに深く、そのことはまた松子への愛惜の深さでもあり、同時にそれは松子の「精神」によって如何に己の「精神」を立たせていたかということの左証でもある。

三

「神経衰弱」も癒え、身辺整理も落ち着きかけた頃、信一が直面して

いたのは、松子存命中から懸念していた「母に就いての問題」であった。結婚後、程なく松子と、妻の母との三人で暮し始め、父を幼い時に亡くした松子の、母一人、娘一人の、その関係の濃蜜さは、信一が傍で見ていて充分に感取していたものである。それゆえに、不治の病にある松子が抱く母の行末の不安は一層熾しいものであるに相違ない、と信一は松子の心中に理解を示していた。その「母に就いての問題」であるのだが、信一にとつて、解決を困難にするものがあつた。要因は、信一が「因襲」を最も嫌う人間であつたのに対して、母はまさに「因襲」の人であつたことである。

妻を見送つて三ヶ月の後、信一は、小説が売れて出来た収入から、自分のひと月分の生活費を除いて、残りを妻の母に渡し、妻の母とは別れて仕事場にと決めた我孫子へ移り住んだ。そしてそこから、妻の母宛てに葉書を書くにあたり、母への呼称をどうするべきか、躊躇している。結局「母上様」と書くことにしたものの、書くたびに違和感があつた。その違和感は、信一がそれまで妻の母に対して、「母親と云ふ感じは曖昧だつたので」「母と呼んだ事が無かつた」からでもあつたが、根本の理由は、妻が亡くなった後のふたりの関係に不自然さを感じていたからであつた。信一は、亡くなった妻の母との関係を、「妻の母親ではあつたが、現在、事実はずうでなく」「習慣」のような関係であると捉えている。

しかし、その一方で、「世上で仮にも親子として頼り合へるのは有難い事だ」という、人情に根ざした感情も持ち合わせていた。「行末一生面倒をみてお呉れよ」と松子臨終の枕許で懇願するも、信一からの返答は保留されたまま不安の只中にいた妻の母が、「淋しくて〜夜もおち〜眠れぬ」と我孫子の仕事場に尋ねて来る。そして「田端に一人で得う居ぬ故茲に置いてお呉れよ」と願ひ出る。そういう母を信一は否めず、

「共に上京の上、兩三日金策に費やして二人で暮らす支度を」整えて、離れが二つある「子の神の別荘」へ移り住む段取りをするのであった。けれど、再び二人暮らしを始めるにあたって、その関係を明確にしておきたかった信一は、言うべきかどうか迷い悩んだ挙句ついに決意し、思いつめていたことを妻の母に言い渡すに至った。

誤解されては困るが、お互いが名義の上で、親子と云はれてゐるけれど、実際はさうでないのだから、私は是迄通り世話はしますが、母親ではない、と云ふ事にしませう。

滝井はエッセイ「小林秀雄氏への公開状 言葉に就いて」^⑤のなかで、次のように言う。

碧梧桐は子規を継いで尚猛然に型を破つた。僕はこの型を破つて解放された海紅の運動に参加したのだつた。それから六朝書の方は、習字の手本にまなぶ書道にあきたらずに、古代の石摺の字にツツカツタものだ。(中略)

僕はこんな風に、形式打破習俗反抗の精神を体得して、作品上の言葉も自分の独特の言葉をかち得たのだつた。

従来の俳句の型を破ってきた河東碧梧桐の、自由律や季題の廃止の方向へと解放されていった俳句誌「海紅」の運動に参加してきた滝井には、そこで体得してきた「形式打破習俗反抗の精神」こそが、彼の文学精神であり、生きる信条でもあった。だから、二人の「習慣」のような関係をその「習慣」のまま続けていくことに、信一は耐えられなかったのである。

「母ではない」と言い渡された妻の母は、猛然と抗議したが、取り合わない信一に嘆き崩れた。が、一夜明けた朝の様子では「気を換へたやうで、(中略)色々よくして呉れます」と、事情を知って様子を尋ねた友人に信一がそう話すように、妻の母の心情は回復していた。

場面が変わり、終結部において、「子の神の別荘」でふたり暮らしを始めた私(=「信一」ととしより)、「妻の母」^⑥との、秋の彼岸前後のことが語られている。「母親ではない」と言い、そう言い渡された二人の様子はと言えば、変わりなく、つつがなく暮らしている。というよりむしろ、これまでよりも心根が通っているようにも読み取れるのである。

私にお金が無いことや、仕事が捗らないことから、娘の月命日にもお彼岸にも参詣出来ないことに機嫌を損ねる おふくろは、私に、「居るつちは大騒ぎして、亡くなつたら線香一本もあげない」と、相変わらず減らず口をたたいてはいる。私はその言葉に「亡くなつた人のことが一杯になつて来て体がぶる／＼顫へて泣け」てくる。松子を想うその想い方は同じではないものの、松子を想う気持ちそれ自体は妻の母とて、私とて同じものなのであった。そして、だから「上京のついでに松子を祀る寺へ」代参をしておふくろの満足な顔を見た「のだと、私 は言う。「おふくろ」を満足させることで、松子を想う気持ちを共有し、安心させたいのである。「母ではない」と言い渡したにもかかわらず、そして言い渡そうと考へ始めて以来、妻の母をとしより と呼称してきた 私 が、ここで おふくろ と語るときのその思いには、名義上の親子関係からの呼称ではない、ともに愛惜する松子を介在したときの、その母親に対しての、真に心から発せられた感慨の深さが読み取れるのではないだろうか。^⑦

私 は、 としより が一泊で東京へ出かけると、いつも「居る」

はずの「人が居ない」ことに「妙に落つ」かないでいる。そして、一泊の予定が連絡もなく四五日帰ってこないと本気で心配になり、「新聞の隅々迄仔細に目を通したりし」ている。一方、としより は としよりで、「ね竹内」と、寺では松子の骨を出してもらうことは思い出して厭だったといったことや、松子の写真を引き伸ばし欲しいことなど、松子のこと、私 に語り掛ける。そして、寝る前には一度提灯をさげながら、私 が仕事をしている離屋の入口まで来て、「もうさきに寝ますよ、早うお休みなさい」と、毎晩断りにくるのである。

信一が言い渡した「母親ではない」ということの真意は、「習慣」の関係を解消することであって、「世話をすることには変りがない」と言っていたように、妻の母が懸念していたような、母を「見捨てる」ことではなかった。「形式や因襲」、「習慣」といった枠組を取り外すことで、素直に精神が流れはじめ。妻の母だから面倒を見なければならぬ。娘の婿だから世話をすべきだ。というような因襲に浸かった義務感のなかでは、互いに精神が「拘泥」してしまう。そういった精神の「拘泥」を取り払ったところに真の感情は生れ流れはじめ。娘婿と、亡き妻の母、といった名義上の関係を解消したふたりは、ともに愛惜する亡き松子との「憶出草」を共有するふたり として、新たな生活を歩み始めていることが、ここには語られているのではないだろうか。そして、このように「憶出草」を共有するふたり として生きてゆくことが、自らの信条を貫きながらも、母の行末を案じていた亡き妻松子の思いに心えるかたちで、信一の導き出した「母に就いての問題」を解決する方法だったのである。そしてもうひとつ付言すれば、精神の「拘泥」を取り払って生まれ流れ出る真の情感こそ、信一が愛惜した、運命に抗わず生の一瞬一瞬に開かれる松子の無垢なる「精神」のあり様に通底するものなのである。

寺では夜分にも拘らず、本堂に、幾本かの蠟燭を点して、私共が預けてをる遺骨の包みを真中に置いて呉れました。私は焼香をして其前に少時坐つて眺めて居りました。不思議に花やかな場所に、彼女は居るのであります²⁾。

参詣した寺の祭壇で信一は、松子の存在が、ほんの小さな遺骨になつてしまったことを目の当たりにする。けれど、「不思議に花やかな場所に彼女が居たという感慨は、これまで信一の悲哀の心中にはかり占有されていた松子が、自分の心のなかだけでなく、何か大いなる「花やかな」ものに囲まれてそこに在る、そのことを実感しているものである。死後も心中に愛惜し続けた実体としての松子はすでに松子ではなく、肉体を喪失した魂の存在として松子が新たにそこに在る。信一はそういう魂の存在として新たな松子をそこに感じたのではあるまいか。そして、そのようにして、信一は松子の死を受容していったのではないかと思われるのである。

注

- ① 長編小説「無限抱擁」は、すでに発表された「竹内信一」(『新小説』大正一年八月)、「無限抱擁」(『改造』大正二年六月)、「沼辺通信」(『新潮』大正二年七月)、「信一の恋」(『改造』大正三年九月)の短編四作品を、それぞれ二章、三章、四章、一章に編んで、昭和二年九月に改造社から刊行されたものである。
- ② 浅見淵「人と文学 滝井孝作」(『現代文学大系』第三一巻 昭和四年一月 筑摩書房)
- ③ 河盛好蔵「解説 滝井孝作集」(『現代日本文学全集』第四巻 昭和三年一月 筑摩書房)

- ④ 山本健吉「作品解説」、『日本現代文学全集』第六四巻 昭和四一年三月 講談社)
- ⑤ 中島国彦「滝井孝作「無限抱擁」の松子」、『国文学』「名作の中のおんな 101人」昭和五年三月臨時増刊号 学燈社)
- ⑥ 「無限抱擁」には信一の俳句として八句挿入されているが、すべてが滝井孝作『折柴句集』(昭和六年八月 やほんな書房)に収録されている。掲出の句は大正六年五月作。句集には、他にこの時期の松子とのことをよんだと思われるものに、たとえば次のような句がある。「話するお前夏座布団の膝真直ぐ」(大正八年七月)、「ポケットにお前のものをもつ秋の夜也」(同年九月)、「お前の許にゆく垣根の草に実が成り」(同年二月)。「膝真直ぐ」には松子の律儀さが、またポケットに隠し持つ「お前のもの」を隠し持つとおしさが、そして「お前の許にゆく」思いが草の実に結実されてゆく充足感がこれらの句には読み取れるものである。
- ⑦ 山本健吉は、「滝井孝作(作家の肖像・四)」、『批評』昭和十五年八月・一月)でこの場面を引用し、ここには「無限のような一幅の絵の情景が浮び上って来る。二人の恋愛の心情の交渉する有様のあまりに純粹な美しさが、反対に現実味を抹殺して、いわば象徴の世界を現前させている」と卓抜な指摘をしている。
- ⑧ 山本健吉は、⑨の「滝井孝作(作家の肖像・四)」で、信一の母への「かかる行為」は、「一つは拒否による習俗の虚偽への復讐」、「もう一つは(中略)娘を生み、娘を売り、娘を死なしめた母親への青年の復讐」を意味するものだとして述べている。本稿は、「かかる行為」は、習俗の虚偽を否定したものであるが、それを母親への復讐とすることには同意しないものである。
- ⑨ 滝井孝作「小林秀雄氏への公開状 言葉に就いて」(昭和五年十月一日発行の『作品』第一巻六号初出、引用は『滝井孝作全集』第六巻 昭和五四年二月 中央公論社)
- ⑩ 本文第四章は、信一の一人称で語られている。本稿第三章は、本文第四章について述べたものであり、「信一」は、語り手 私 として表記するべきところであるが、本稿全体の整合性から「信一」と表記してきた。が、必要に応じて語り手 私 の表記を用いた。また、語り手 私 の、

滝井孝作「無限抱擁」を読む

松子の母親に対する呼称は、「母(母親を含む)」、「としより」、「おふくろ」の三通りに表記されている。本稿での呼称は、便宜上「母」あるいは「妻の母」とし、必要に応じて本文の呼称に従った。

- ⑪ 語り手 私 の、松子の母親に対する三通りの呼称「母(母親を含む)」、「としより」、「おふくろ」の、その区別は必ずしも厳密でないようであるが、場面や 私 の心情に照らし合わせて使い分けられているのではないかと思われる。本文第四章は、某年二月二日の松子臨終の直後の場面から、その年の九月の彼岸明け頃までのことが語られているが、臨終直後は、「母(母親)」の呼称が多く、混在しながらもやがて呼称「としより」が増えてくる。「おふくろ」はわずか九箇所。そのうちの四箇所がこの場面でも繰り返される。呼称「としより」は、作中第三章の松子の俳句「としよりが窓からをしへる土手の萩の花」にもあって、決して蔑称ではないが、本文中にあつてはより客観的な印象を受けるものである。

- ⑫ 山本健吉は、⑨の「滝井孝作(作家の肖像・四)」で、この箇所を引いて、「不思議に花やかな場所」と言った感銘こそは、自然の感情に違い無いのだ。」とし、「このような純朴な心情の裏に、女への愛情の切ない昂揚をひしひしと感じ取ることが出来るのだ。」と述べている。

引用の本文は『滝井孝作全集』第一巻(昭和五三年九月 中央公論社)に拠る。なお、漢字の旧字体は新字体に改めた。

(ポトナム短歌会同人)